

論文

中国知識界は西欧ポストモダニズムをどう見るか

—批判的受容から「日常生活の審美化」まで—

桑 島 由美子

要 旨

中国において受容された西欧文化理論は、80年代方法論熱の中で、西欧マルクス主義として積極的に導入された批評理論、テリー・イーグルトンやフレドリック・ジェイムソン、ヴァルター・ベンヤミンなど、初期の段階では文学、美学と親和性の高いものであった。

中国における狭義の「ポストモダニズム」は、80年代のアメリカで文学理論や文芸批評を足場に大衆化、通俗化していったポストモダン思想の共時的受容と言えるが、過去30年の文芸学と文学研究におけるその影響について、中国では様々な省察が見られるようになって来ている。文化界・学術界における批判的受容と、人文、社会科学の脱領域化への広範な影響、文芸理論の「批評化」現象と90年代文化批評の批評的「実践意識」の確立、新しい修辞学としての受容、今世紀に入ってから文化美学、哲学の成熟やポストモダン消費文化論の浮上など、考察すべき対象は広範囲に渉る。特に90年代、文化価値の転換期における中国知識界の模索を、ポストモダン受容の動態を手掛かりに辿ってみたい。

キーワード：グローバル化時代の文化財 「後学」と「新学」の関係 新しい修辞学

「大衆文化」の隠されたロジック 日常生活の審美化問題 文芸学と文化研究

序言 ポストモダニズムと中国モダニティ

中国では、ベンヤミン、ローティ研究で知られ、ニューヨーク大学比較文学系教授でもある張旭東⁽¹⁾は、文化美学と「中国におけるポストモダン」研究に傾注する中で、その特殊性を次のように語っている。「モダニズムからポストモダニズムへの移行は、物質世界の覇権構造の根本的改変を意味するわけではなく、更には「モダニティ」の終結を意味するものではない。」⁽²⁾「特に強調しておきたいのは、中国のモダニティ自身の特殊性は、それが19世紀世界秩序に対して決して屈服したのではなく、それに真っ向から抵抗したことにある。辛亥革命、五四運動を起点とする中国の近現代史そのものが、「近代」世界秩序への熾烈な反抗であり、中国の19世紀後半以来の「近代化」への努力に対する批判的超越であることだ。」⁽³⁾目下ポストモダン論争の争点として浮上した「モダニティ」の歴史的背景について中国の特殊な認識を確認した上で、「中国ポストモダン」という曖昧な概念とははっきり区別して「中国におけるポストモダン」を次のように定義している。「中国におけるポストモダンとは、何を指すのかと言えばそれは中国の学者（特に外国文学、文化理論界の学者）の西欧「ポストモダニズム」文芸作品や、思潮、理論に対する解釈や翻訳を指す。」従って、「（その文化の生じた環境と同じく）中国におけるポストモダニズム理論は学院派のエリート言説であり、知識界のサークル内に流通するものである。」⁽⁴⁾また、社会現象を見る上では、90年代の中国都市空間の「グローバル化」への飛翔は、中国経済と文化の不均衡発展とグローバル資本主義ユートピアとの間に、浮遊し彷徨う連結点となっている。

張旭東が言うように狭義における「中国におけるポストモダニズム」は、80年代のアメリカで文学理論や文芸批評を足場に大衆化、通俗化していったポストモダン思想が、中国では「新しい文化理論」として共時的に取り込まれた経緯を指す。また一方では社会文化状況を形容する時の「ポストモダン」と思想や理論をめぐる「近代批判」が相矛盾し、交錯する側面を露呈してきた。張旭東はその後、「グローバル化時代の文化悖論：多様性が単一性か」では、問題の本質がジェイムソンの「抑圧的多元性」の問題にあるとして、「グローバル資本主義およびポストモダン文化のコンテキストの中では、結局のところ人民の願望を支配するのは資本主義生産と消費のロジックである。このような利他主義の特殊な現代—あるいはグローバル化/ポストモダン—新しいスタイルは、文化が経済に変容し、経済が文化に変容することに鑑みれば、また資本と身体の相互浸透から見て、それは暗にまた必然的に政治性を備えることを運命付けられ、それに先立つ普遍性概念の教育主権者はすなわち資本自身である。ポストモダン/グローバル状態の歴史性を帯びたこの様な政治哲学理解に対して、批判的意識を抱く知識人にポストモダニズムや消費中心主義の文化言説に「慎重な距離」を維持するよう促すのが賢明だろう。これらの言説はグローバル化時代の文

化財である、しかし、これに対して私たちは「驚きと畏怖を以て観察せざるを得ない」⁽⁵⁾ (ベンヤミン「歴史哲学テーゼ」)と述べている。張旭東が「歴史哲学テーゼVII」から引用したと思われる部分には「こんにちにいたるまでの勝利者は誰もかれも、いま地に倒れているひとびとを踏みにじってゆく行列、こんにちの支配者たちの凱旋の行列に加わって、一緒に行進する。行列は従来の習慣を少しもたがえず、戦利品を引き廻して歩く。戦利品は文化財と呼ばれている。支配者たちはしかし、歴史的唯物論者という、距離を保った観察者がいることを覚悟しておくがよい。じっさい、この観察者が展望する文化財は、ひとつの例外もなく、戦慄をおぼえずには考えられないような由来を持っているではないか。」⁽⁶⁾とある。

「モダニティ」の背景にある特殊な歴史認識は現在の世界秩序に対する批判にも、色濃く投影される。そして中国のポストモダンや近代化イデオロギーを議論する際、その核心にあるのは依然として「現代性 (モダニティ)」である。

かつて新保守主義の「ポストロジー」と揶揄されたドメスティックな「後学」論議を克服して、中国とアメリカの社会科学交流が本格化した時期に学究生活に入り、留学後北米の学界、批評界に身を置く世代の一人である張旭東から見て、「中国におけるポストモダン」とは改革年代の中国知識人の外部世界に対する感知であり、更に多くの中国人にとっては自身の歴史的境遇と文化的可能性の意識と観測であった。またポストオリエンタリズム、ポストコロニアリズムに対しては「オリエンタリズムには、一つの言説としての複雑性が備わっている。——特殊な歴史社会状況の一つの象徴であり、ある特殊な政治イデオロギー体系の吐露でもあるが、それは欧米資本主義・殖民主義・帝国主義の膨大な物質と記号の投資によってはじめて実現されたのである。しかし地球上の大多数の人々は依然として西欧化と発展の趨勢の中、あるいはモダニティの現世に生存を希求する運命にある。」と述べている。「オリエンタリズムと象徴の政治—他者の時代に自我を記述する」ポスト冷戦時代の中国問題については、同じく在米の批評家で、フーコー研究で知られる劉康がいる。彼は「後学」と「新学」との関係について次のように述べている。ここでの「後学」は80年代西欧のポストモダニズムを指し、「西欧学術界では学術性とエリート化を標榜して、現実の政治から離反し、空洞化の危機に直面している」が、中国のもう一つの「新学」即ち「新左派」と密接な関係にある。相対する「新学」は新保守主義と新自由主義など、保守の主流イデオロギーを指す。「両者は統治者と批判者の関係にあるが、知識界の体制化と専門化により、アメリカでも批判思潮が周縁化されている。」⁽⁷⁾しかし中国では現実には「後」も「新」に回収され、西欧の非主流イデオロギーが中国独自の理論構築のための主流イデオロギーとなり、ポスト天安門事件の文化的空白を「ポストイイズム (后主義)」が埋め、文化界では「ポスト新時期」「新写真主義」等の歴史区分がそれを正当化したため、所謂「後学論

争」が起きたのである。複雑な様相を呈する90年代の文化批評を読み解く上でも、文化界の論争から視点を拡げて、「中国におけるポストモダニズム」を学界全体から眺めてみたい。

(1) 学界におけるポストモダニズム研究の諸相

西洋哲学専攻でポストモダン研究の第一人者である北京大学の王岳川教授の『後現代後殖民主義在中国』⁽⁸⁾によれば、90年代に翻訳された主な著作は、リオタール、デリダ、ポール・ドマン、ジェイムソン、ギデンズ、ミラー、サイドなどで、ポストモダン推進派を見ると、いわゆる「後学」論者以外にも自然科学や社会学など領域は多彩だが、概して楽観主義で未来志向であり、文学や美学・芸術関係が比較的多く、またデリダの他、イェール学派など早くから紹介された「脱構築」に強く共鳴し、先端的な理論研究に携わる人が比較的多く見られる。⁽⁹⁾

思潮研究、フォーコー研究で知られる王治河は、『もう一つのポストモダニズム』の中で、「人と世界、人と人の関係を再建し、未来に楽観精神を抱くべき」と主張しており、80～90年代にはエコロジカル・ポストモダニズムを提唱している。ラディカルなポストモダン主義者と新しい哲学思想体系や世界観の構築には慎重な態度を見せている。⁽¹⁰⁾ 滕守堯は80年代に西洋美学、審美心理学、芸術社会学を研究し、西洋の「対話」理論を中国の実践に取り入れ、モダン思潮とポストモダン思潮との対話という方法論を通じて、「審美文化」の現代的機能を探求している。また「ポストモダン過程論」を堅持しつつ、それを審美文化研究の領域で推し進めている。⁽¹¹⁾

西洋美学の張法は、『ポストモダンおよびその中国文化との関連』の中で、「語彙としてのポストモダン史」「各学科のポストモダン」「文化概念としてのポストモダン」「大ポストモダンと小ポストモダン」に分け、客観的な態度で論じている。⁽¹²⁾ 呉曉明は社会思想研究で知られるが、マルクスをポストモダンの先駆と位置づけ、建設的な科学論を唱えている。尹樹広（黒竜江大学哲学系）は、ポストモダンは決して俗流唯物主義でも虚無主義でもないとし、学界のポストモダン批判のマイナス面を指摘し、全面的に弁護するとともに、資本主義近代化の文化精神基礎に反省を促している。⁽¹³⁾ 郭貴春（山西大学哲学系）は『ポストモダン科学実在論』の中で、科学実在論の現代的意義を強調している。⁽¹⁴⁾ 陳曉明（中国社会科学院文学研究所）は、文化先鋒とポストモダニティ、「後学」関係の著作は多岐にわたり、強調点は二つあり、①「混乱と誤読を正し、中国ポストモダンの立場と観点、方法を検討すること。学術権威となった国際学術交流のあり方への疑義。」また②「ポストモダン研究者が理論と対象、全体と部分の区別がつかなくなっている」ことを指摘してい

る。⁽¹⁵⁾

張頤武（北京大学中文系）は後学への見解が体系的であり、影響力も大きく、推進者の観点を体現している。90年代の国情から、啓蒙言説の転換は歴史的必然であり、中国を解釈する理論の一つとしてポストモダンが有用であると主張する。鄭敏は、漢語詩学の研究から脱構築を重視し、脱構築以後の文化建設問題に関心を持ち、中華文化による新伝統の建設なくしては、自分たちは文化孤児になると主張している。⁽¹⁶⁾ 王一川（北京師範大学中文系）は、先端的な文学理論の研究に取り組み、「ポストモダニズムはモダニティが全地球規模に膨張、拡張したもの」としてグローバル化消費主義と狭隘な民族主義の両方に警鐘を鳴らしている。ポストモダン・ポストコロニアル文化研究に大きな影響力を持ち、「後学」の当代意義については肯定的な態度で臨んでいる。⁽¹⁷⁾ ポストモダンの歴史回帰については、河清（フランス留学・美術史研究）、王賓（中山大学外語系）の文化批評のほか、曾艷兵（青島大学）が東方ポストモダン問題を取りあげ、オリエンタリズムのもとに中国を語ることの問題を指摘している。⁽¹⁸⁾

ポストモダン批判の諸相

批判者について見ると、西洋哲学の専門家による学術的な検討が加えられ、またそこにはポストモダン思潮、理論そのものを研究している人々も含まれる。公共領域や、公共世論、知識人の問題など、社会理論や歴史方面の論者が比較的多く、社会経済学者も含まれている。⁽¹⁹⁾ 具体的には、当代文化研究で知られる徐友漁（中国社会科学院哲学研究所）が、西方言説を横断的に移植しているのはむしろ「后学」家の方であるとして、五四以来の啓蒙伝統の維持とモダニティの擁護を訴えている。宗教学（基督教）の趙敦華（北京大学哲学系）は「流行の遊戯を厳粛な学術に替えている。」「ポストモダンは實際上、全面的に刷新された思想ではなく、現代哲学の雑多な寄せ集めだ」と述べている。⁽²⁰⁾ ポストモダン哲学と中国のポストモダン問題については、鄧曉芒（武漢大学哲学系）が哲学、文学両面から論じている。

公共領域や公共世論といった立場からポストモダンの有限性を論じている例としては、劉小楓と呉伯凡の対談があり、モダニティの問題と社会理論について論じられている。張国清（浙江大学哲学系）は『中心と周縁』（1998年）において人文精神「失落」の問題にも言及している。社会経済学、近代化論の馮承柏（南開大学）は「中国社会経済の諸方面において、ポストモダンが生じる条件は整っていない。」とし、「それは時空を超えて浸透する芸術、思想、文化の概念に限定されるべきである。」と主張する。⁽²¹⁾ 公共性問題に詳しい賀来は「新時代の懐疑主義哲学による公共性の喪失」について論じている。⁽²²⁾

文芸思想に目を転じると、盛寧（中国社会科学院）『人文困惑与反思』は、重要な文献で

あり、「ポストモダニズムが表現しているのは、「解釈」であって、「事実」ではなく、条件付きの「仮説」であって、無条件に受け入れられる「真実」ではない。」としている。ポストモダニズムによって西欧と中国の価値形態の問題が混淆し、中国の近代化建設がポストモダン言説によってバランスを失ったとして、この移入された新風潮に批判的態度を取るべきだと主張する。またポストコロニアル、グローバル化の問題にも触れている。⁽²³⁾

構造主義とポストモダン文論については王逢振（中国社会科学院外文研究所）がポスト構造主義研究の中で、「ここ数十年、アメリカの文壇で脱構築が中心となり、その他の学派が周縁化された」として、ポスト構造主義に、「脱構築」と「実用主義」とを位置づける。またサイドについての論考もあり、ポストコロニアリズムには積極的な意義を認めている。⁽²⁴⁾ 章国鋒（中国社会科学院外文研究所）は、ポストモダニズム文学と作家への批判を展開している。⁽²⁵⁾

ポストモダン思潮の退潮以後の問題としては、文学研究の孫紹振（廈門大学文学院）が、「価値のマイナス面」「ポストモダン以後、知識人は精神的な救済問題に直面する」という二点から論じている。ポストモダニズムは決して中国当代文化転型の福音ではない。⁽²⁶⁾ 尤西林（陝西師範大学中文系）は、人文知識人の問題について触れ、ダニエル・バルの60年代「イデオロギーの終焉」から、「ポストイデオロギー」が中国文化界と西欧の意思を疎通させる対話の基礎となっていることを指摘している。⁽²⁷⁾ 余虹（中国人民大学中文系）は知識人の地位と機能については共通認識を持つべきで、「知識人は不断に心性価値を発展させることを否定し去ってはならない。」と主張する。⁽²⁸⁾

文化哲学の範進（中国社会科学院哲学研究所）は、「ポストモダン状況下の哲学は、思想の範式というよりも、叙述のための技術的哲学と言った方がよい。」⁽²⁹⁾ とし、西洋哲学の韓震（北京師範大学哲学系）は歴史学の問題について触れ、「ポストモダンは非理性主義の上に発展してきた新しい特徴の表現である。ポストモダンは中心を解消して自己を中心となし、信念のないことを信念とし、基礎のないことを基礎とし、無制限をもって限度とする。人々の相互理解の靱帯を切り裂き、個人主義に偏執する。」と激しい批判を加えている。⁽³⁰⁾ 叶知秋（西北師範大学中文系）はアルチュセールの「徴候的」読解の病理学的な分析方法を用いている。⁽³¹⁾

批判者について共通して見られるのは、価値への配慮と人文精神の問題、そして自己の批判的立場への不断の審理である。

(2) 文化理論の浸透と、学術界の脱領域化

文革後の文芸学は、西欧マルクス主義の理論を借りて、文学を美の価値系統と見なす「審

美イデオロギー」論から出発している。

80年代から今日までの経緯を眺めると、フレドリック・ジェイムソンの理論が早くに中国の「文化転換」を促し、その批評を目的とした文化理論は、今日まで決定的かつ支配的な位置にある。そのジェイムソンが中国におけるポストモダンの二つの成果として挙げているのは、「理論の浸透」と、「学科批判」である。

西欧文化理論は、90年代初期には、文学領域から、当代中国の外国文学、映画、美学研究にも波及していった。学術の動態から見ると様々な分野で受容されたが、90年代には社会学、人類学が活況を呈し、80年代までは文学の領域であった自我省察、社会と歴史文化に関わる領域を社会学が代替するようになった。

最も大きく発展したのは一つはポストコロニアル批評⁽³²⁾の中で、サイードのテキストが突出していたことその他、フーコーの「知識—権力」やグラムシの「ヘゲモニー」の概念の影響が強い。排外的な思潮の影響で、晦渋で複雑な理論を単純化して、新しいナショナリズムの言説に転用されたという批判⁽³³⁾も見られるが、最近では、ポストコロニアルのコンテクストにおける中国知識人の問題、即ち公共性の喪失、周縁化、ポストモダン理論の勃興についての研究が注目される。

また陶東風に代表される「文化研究」の進展も著しいもので、90年代後期には文学の領域を超えて、翻訳、言語学、心理学、記号学、人類学まで巻き込み、歴史学の考証、社会学のフィールド調査、経済学の政治分析まで取り込むようになっていく。文学研究においても、文学テキストは閉じられた対象ではなくなり、社会生活実践との関わり、流通、消費、メディア社会学などの方面において発展した。

このように批判的受容を経て、多領域に浸透したポストモダン理論は、複数の学科の脱領域化に少なからず影響している。とりわけ「文化研究」が文学研究に浸透したことについては「后学科」問題として伝統的な文芸学に携わる研究者から批判が噴出している。例えば『中国当代文学理論（1978-2008）』では、董学文が「“文化研究”と文芸学の学科危機問題」として、「文化研究には統一された理論指向も、明確な研究パラダイムも無く、系統も雑駁で不確定であり、開放された知識体系とは言え、一つの学科を成すとは言い難い。」と述べて、中国における萌芽、発展、確立の過程を振り返っている。その背景にあるのは、90年代中後期における市場経済の発展であり、文芸学の「文化転向」への着目である。「文化研究」がその領域を拡張して、文学理論界に華々しく登場したのは「日常生活審美化」の論争においてであり、この論争と「学科の危機」問題は深く関わっている。その焦点は文学理論の「境界」についての議論であり、文芸学科の理論性とエリート文化が、通俗化し散佚した研究対象との乖離を生じたことが指摘される。また、誰の日常生活が「審美化」されたのかと言えば、一部の新興ブルジョワジーとエリートであり、「審美化」提唱者の言

う「大衆文化」勃興の事実は認め難い。更にその美学原則と価値趣向に対する否定、すなわち「日常生活の審美化」の意味するところは「審美の日常生活化」であり、技術、功利、感覚的享楽が審美と精神的価値に置き換わるものであるとの批判が続いた。⁽³⁴⁾

蓋生『価値焦慮…新時期以来文学理論熱点問題』によれば、「日常生活審美化」は、2001年に『文学評論』に掲載され注目を集めたヒリス・ミラーの「文学終焉論」の延長にあるエッセイ文芸学であり、理論的虚構であって従来の文芸学に代わり得るものではない。従って本来、文芸学とは関わりが無い「日常生活の審美化」の合法性を文芸学の範疇で論ずべきでない。文化研究は文芸社会学に帰属すべきであり、文学における文化研究の退潮は歴史的必然であると述べている。⁽³⁵⁾

(3) 日常生活の審美化問題

21世紀に入り、ここ数年中国におけるポストモダン学術研究は成熟し、思想と学術の分化を経て、一時期のイデオロギー論争から理性的段階に入り、学術的価値のある成果を生み出しているが、文化市場の成熟に対応して「消費文化」に関わるテキストが突出して来ている。ボードリヤールの「消費社会」とフェザーストンの「ポストモダンと消費文化」が翻訳されて広く読まれ、⁽³⁶⁾消費記号論、都市文化論、生活の審美化、文化美学などに認識が深まり、階層化や格差社会についても消費文化論から考察が為されるようになって来ている。上述の「日常生活審美化論」と併せて、更に検討してみたい。

文芸学の新しい課題としての「日常生活の審美化」は、これまでの「大衆消費文化批判」議論の蓄積に、新しい局面を添えている。文化政策と連動しての「生活の審美化」問題は、文化市場の成熟に対応した新しい文化媒介者、象徴生産者の育成、ホワイトカラーの創出を唱えるが、先に挙げたフェザーストンの「ポストモダンと消費文化」において「生活の審美化」が詳細に論じられ、論争にも少なからぬ影響を与えているので、この著作の内容について触れておきたい。

消費文化によって消費による充足感と地位が差異を誇示し、社会的に構造化される。象徴的財は過剰供給され、文化的無秩序と脱階層化を加速化させる。消費文化は資本主義的商品生産の際限ない拡張を前提とし、そこには記号の積極的な操作が必然的に伴う。イメージと現実の境界を曖昧にするシミュレーションの際限ない反復により、消費社会は本質的に文化的なものとなる。

インテリ階層の中にシンボルの生産者、新しい文化媒介者が生まれ、文化的脱領域化の現象は至るところで見られる。象徴生産の潜在力は大きくなり、生産や技術の拡張より、伝達や消費の形式、感性への対応が探求すべき問題となって浮上してくる。

「日常生活の審美化」とは、生活を芸術作品に変容させるプロジェクトであり、新しい趣味や感性の追求が分化、差異化される。大都市における日常生活は審美的になり、芸術の産業への移行が起こる。ポストモダン都市においては、次第に共同体的感覚、感情の共同体において集合する「審美パラダイム」が生み出され、個人主義を超える。この著作では、ジンメル、ボードリヤール、ベンヤミン、ジェイムソン、マンハイム等々が引用されている。

生産高を伸ばすために商品の多様化と差別化を支える技術的な資本量が変化し、市場がますます細分化され、ライフスタイルのメッセージは多様に読み込まれるようになる。

フランクフルト学派の大衆文化論はある種のエリート主義であり、大衆消費社会からイメージされる階層横断的な均一化は、意味を持たず、人々が認知され得る差異を追求し続ける中で、解消されるものである。⁽³⁷⁾

知識人や学者といった文化資本を大量に所有する人々にとって、威信、相対性、正統性、相対的希少性、それゆえの文化資本の相対的価値は、文化的商品の市場への拒否によって支えられている。地位とアイデンティティの危機、大衆迎合的な精神に抵抗するが、次第に新しい文化状況に親和性を見せる。

ポストモダニズムに見られる感性の起源は、ロマン主義運動にまで遡ることができる。文化的イメージとしての秩序解体、熔解、相対主義、断片化。そしてポストモダニズムの中心の特徴のひとつは知識人の役割という社会的機能の変化にこそ関連があると言える。

ポストモダンと消費文化はある意味では同義と見なされて、展開してきた側面があり、メディア環境の変化や都市化の進展による、文化市場の成熟に対応して、新しいキーワードとして浮上ってきている。

張末民、朱竟、孟春蕊編選『新世紀文芸学的前沿反思』から中国での論争の経緯を見ておきたい。

1984年に国務院が産業統計において第三次産業に文化産業の項目を設け、文化の産業化に第一歩を踏み出す。1998年文化部長、孫家正が文化部に文化産業司を設立。2001年には『文化産業発展第15カ年計画』が発表された。文化産業と人材の育成は、新しい雇用を生み、文化媒介人、文化白領（ホワイトカラー）の階層を生む。（編集、商業デザイン、装丁、包装デザイン、商業ディスプレイ、広告学など。）ポストインターネット時代の都市生活の美化、公民養成教育の目的もあり、それはかつて「文革」時期の階級闘争教育や、今日の拝金主義、消費主義の腐蝕によって損なわれたものとされている。⁽³⁸⁾（陶東風『文芸争鳴』2003年第6期）趙勇は、「誰の“日常生活審美化”なのか？ どのように“文化研究”を行うか」（河北学刊2004年第5期）の中で、「西欧学者が“日常生活審美化”現象について語る時、彼らが行うのは事実判断のみであり、価値判断ではない。フェザーストンはポストモダンのシンパであり、いったん価値判断を行えば、本質主義の思考方式と操作の自

己矛盾に陥るためである。しかし価値判断なき分析は、文化研究を言葉の遊戯に変えてしまう。⁽³⁹⁾と述べている。魯枢元は、「評所謂“新的美学原則”的崛起」（『文芸争鳴』2004年第3期）で「市場の見えざる手はいったい誰の手か？」で、欲望—消費—市場—産業化のロジックと、「消費型快樂美学」がわれわれの時代の「感性特徴」として「カント理性主義道徳美学」に対する「新しい美の原則」になっていること。「見えざる手は、ごく一部の人の、あるいは大衆の、あるいは市場開拓、市場増殖の要求なのか？」と述べている。⁽⁴⁰⁾また魯は「価値選択与審美理念—關於“日常生活審美化論”的再思考」（『文芸争鳴』2004年第3期）の中で「昨今の人々は、多かれ少なかれ“感性を享受”するとき、当代の“市場経済”“貨幣体制”の拘束と制約を受けざるを得ない…」「いわゆる“経済的実力”がすでに現代世界の最高の覇権となった。“新自由主義”の理論家は“グローバル企業”を“民族国家”に代える構想を打ち出したが、それは一つの“理性権力”をもう一つの“理性権力”に代えるに過ぎない。」としている。⁽⁴¹⁾

陶東風によれば、（『大衆消費文化研究的三種範式及其西方資源—兼答魯枢元先生—』）2003年11月に首都師範大学文芸学学科と『文芸研究』が“日常生活審美化与文芸学的学科反思”学術討論会を主催し、関連する文章が発表されると、論争が起こった。⁽⁴²⁾

北京師範大学文芸学中心では2004年5月に“文芸学的边界”学術会議で、「日常生活審美化」問題を集中的に論じ、2004年6月に中外文芸理論学会が、中国人民大学で開催された時にも、討論の焦点となった。

陶東風は日常生活審美化の問題は、大衆消費文化を組成する一部であるとして、中国大衆消費文化の研究史について3つの系統に分けている。

1 批判理論と中国大衆文化研究では、大衆文化への批判は70年代末、80年代始めころから見られ、主に香港台湾流行文化と非本土大衆文化に対するものであった。西欧大衆文化の批判理論は、特にフランクフルト学派の理論は、最も早く伝わり、普遍的規範となった。93年以降に大衆文化批判理論が流行したのは、“人文精神”の討論において重要なコンテクストになったためである。中国知識人が90年代に提唱した“人文精神”は、大衆文化に対峙するところのもので、この後も、大陸ではエリート主義、道徳理想主義と審美主義が大衆文化批判の主流となった。『“人文精神与大衆文化”筆談』（『文芸理論研究』2001年第3期）では、「大衆文化の発展のためには一つの批評メカニズムが必要であり、—それは大衆文化に人文主義という—商品拜物教神ではなく—最終的価値を提供する」とあり、今日でも「人文精神」という批評規範は延続している。90年代には政府の干渉と、市民社会の不成熟によって、「マイナス効果」が助長された。

2 近代化理論と中国大衆文化研究

近代化理論は、社会科学あるいは社会理論に近いと言える。

近代化理論は、中国社会の近代化、世俗化という観点から大衆文化を肯定した。代表者として李沢厚、王蒙、後期の金元浦が挙げられる。“世俗精神”論者は、「人文精神」の対立面にあるのは、市場経済と大衆文化ではなく、計画経済と極「左」イデオロギーであるとしている。

ここで、フランクフルト学派の機械的模倣が、一つの批評規範となって、西欧理論によって、中国の経験が犠牲にされたのではないかという反省が生まれる。陶東風自身の大衆文化観は複雑なもので、無条件にはその合理性を楽観的に肯定できない。大衆社会と市民社会の関係について1995年に『官方文化与市民的妥协与互渗——89後中国文化的一种审视』（『中国社会科学季刊』1995年秋季号）で検討を加えている。大衆文化、大衆メディアの民主的な潜在力は認めるが、その妥協的性格から「官方」「民間」との狭間で様々な困難を生じる。

3 新“左”派理論と中国大衆文化理論

新左派は、抽象的な道徳批判や審美批判ではなく、政治経済学分析や、階級分析から大衆文化に激しい批判を加えてきた。新左派の大衆文化の規範となったのは、1997年第二期の『読書』で、「大衆・文化・大衆文化」を特集した。

「大衆化」というのは表向きで、ホワイトカラーの消費文化であると主張している新左派の代表的な大衆文化批判のテキストとしては、戴錦華の「大衆文化の隠された政治学」があげられる。「広場」(square → plaza) 意識と「職場 (post) 意識」という概念を抽出して、知識人の専門化への要求と解釈し、商業と政治の合体、合流関係について論じている。消費主義と市場資本主義のロジックが流用されて主流イデオロギーとなり、90年代繁栄の極に達した大衆文化と大衆メディアは期せずして自己を中産階級の趣味と消費に位置づけた。大衆文化とは中産階級文化のことである。大衆文化というのはかつての通俗文化ではなく、中産階級の利益を合法化して、両極分化の現実を覆い隠す「文化覇権の実践」として論じている。消費文化の最先端に出現する新しいハイカルチャーと、その現実をカモフラージュする言葉との関係についての批判、つまり現実を覆い隠す役割を負う「言葉やメディア」の機能についても考察がなされている。

新左派の大衆文化論は最新の発展の趨勢を担い、政治経済学分析が優勢となってきている。陶東風は、新左派は単純に全てを中産階級のイデオロギーで括り、知識人の多くがなぜ大衆消費主義の一面である「消極自由主義」に陥っているのかという点を見逃している。と述べている。

結語

序言で述べたように、中国知識界におけるポストモダニズム観は「中国モダニティ」、狭義においては、審美イデオロギーや審美モダニティの問題を焦点化し、新思潮でもなく、体系的な理論でもない西欧ポストモダニズムが惹起した「失語」と「価値の焦慮」、今日における学科の危機と、文化研究の退潮等への省察を深化させている。

文芸学、文芸理論における大衆文化・消費文化の扱いは、今後一つの焦点となり得ると思われる。幾つかの規範や概念の見直しなど、議論の行方は未知数であるが、「日常生活の審美化」問題は、これまで主流であった審美哲学と、大衆文化論の合流であり、文化社会学メソッドの復権でもある。しかし文芸学においては、徹底的な批判によってこれを乗り越えていこうとする動きが顕著である。

日本においても、中国の現代思想受容において個別の思想家に着目する研究成果が現れ始めている。井波陵一氏の「中国におけるヴァルター・ベンヤミン研究について」⁽⁴³⁾ではベンヤミンを取りあげるに当たって王国維の「紅樓夢研究」が著者の念頭にあったという指摘があるように、同時代の文化現象から遡って想起される歴史的「射程」に思いを馳せてみたい。現に中国の最近の人文研究においては、文化理論のタームが文学史や歴史研究に幅広く応用され、輻輳する事象を今日的視点の遡上に乗せるばかりでなく、文化理論も中国的コンテクストの中で新しい進化を遂げている。変転きわまりない80年代半ば以降の文化思潮についても、今日的な視点から、歴史的考察が為される時期が来たように思われる。

註

- (1) 張旭東は、1965年生まれ。86年北京大學中文系卒業。90年に渡米し、フレドリック・ジェイムソンに師事。デューク大学文学博士。現在ニューヨーク大学比較文学系終身教授。著書に『発達資本主義時代の抒情詩人』（北京：三聯書店、1989年）『幻想的秩序—批評理論と当代中国文学話語』（香港：牛津大学出版社、1997年）『小品文与中国新文化的危機』（博士論文）『全球化時代的文化認同—西方普遍主義話語の歴史批判—』北京大學出版社 2005年 『批評的踪跡—文化理論与文化批評1985～2002—』生活・読書・新知 三聯書店 2006年
- (2) 張旭東「后現代主義与中国現代性」『読書』1998年第2期
- (3) 同上
- (4) 同上
- (5) 張旭東「全球化時代的文化悖論：多様性還是單一性」『二十一世紀』2002年第5期
- (6) 今村仁司 ベンヤミン「歴史哲学テーゼ」精読 岩波現代文庫 2007年 p 62（野村修訳）

中国知識界は西欧ポストモダニズムをどう見るか

- (7) 劉康「当代西方思潮中的“新”与“后”」『文景』2005年8月
- (8) 王岳川著『后現代后殖民主義在中国』首都師範大学出版社 2002年
王岳川『后現代后殖民主義在中国』における后学思想研究者は以下のとおり。
汪堂家(デリダ) 張世英(ヘーゲル) 湯一介(伝統哲学) 叶秀山(ソクラテス) 鄭家棟(新儒学) 楊耕(ポストモダニズム) 劉小楓(現代性) 汪暉(現代性) 劉放桐(現代西洋哲学) 江天驥(フランクフルト学派) 李幼蒸(理論記号学) 宋祖良(ハイデガー) 歐陽謙(西洋哲学・弁証法) 孫利天(弁証法) 孟建偉(科学技術哲学) 鄭祥福(科学哲学) 馮俊(デカルト・ポストモダニズム) 楊大春(脱構築・テキスト) 李銀河(フェミニズム) 胡金生(フェミニズム) 卓新平(宗教・神学) 付文忠(思潮・文化政策) 張世平(社会学) 王小章(社会心理学) 趙一凡(文化批評) 王寧(文学批評・ポストモダニズム) 程文超(ポストモダニズム) 王岳川・王一川(ポストモダニズム) 史成芳(詩学) 王德勝(審美文化) 段煉(芸術)
- (9) 后学文化推進者は以下のとおり。王治河(思潮・フーコー) 滕守堯(西欧美学・審美心理学) 張法(西洋美学・芸術学) 吳曉明(社会思想) 尹樹広(ポストモダン理論) 郭貴春(科学实在論) 陳曉明(文学) 張頤武(后学) 鄭敏(脱構築) 王一川(ポストモダニズム・文学) 河清(ポストモダニズム・美術史) 王賓(ポストモダニズム) 曾艷兵(中国当代文化)
- (10) 王治河「一種后現代主義」ハルビン『求是学刊』1996(6)
- (11) 滕守堯は中国社会科学院哲学研究所研究員。主な著作に『審美心理描述』北京 中国社会科学出版社, 1985 『芸術社会学描述』上海 上海人民出版社 1987 『中国懷疑論傳統』沈陽, 遼寧人民出版社, 1992年 『文化的辺縁』北京 作家出版社 1997年
- (12) 張法 中国人民大学哲学系教授。
- (13) 吳曉明 復旦大学哲学系教授 主要著作に『歴史唯物主義的主体概念』上海 上海人民出版社, 1993年 『科学与社会』上海, 遼東出版社, 1995年 『馬克思主義社会思想史』上海, 復旦大学出版社, 1996年
- (14) 郭貴春は山東大学哲学系教授, 主な著作に『后現代科学实在論』知識出版社, 1995年 『后現代科学哲学』長沙, 湖南教育出版社, 1998年。
- (15) 陳曉明は中国社会科学院文学研究所研究員。主な著作に『無辺的挑戰—中国先鋒文学的后現代性』長春, 時代文芸出版社, 1993年。『解構的踪跡: 話語, 歴史与主体』北京, 中国社会科学出版社, 1994年 『剩余的想像: 九十年代的文学叙事与文化危機』, 北京, 華芸出版社, 1997年, 『仿真的年代』太原, 山西教育出版社, 1999年 『文学超越』北京, 中国發展出版社, 1999年。
- (16) 張頤武 北京大学中文系教授
鄭敏 北京師範大学外語系教授
- (17) 王一川 北京師範大学中文系教授
- (18) 河清 美術史研究主な著作に『現代与后現代』杭州, 中国美術学院出版社, 1998年 王賓 中山大学外語系教授 曾艷兵 青島大学教授, 主な著作に『東方后現代』桂林, 広西師範大学出版社, 1996年
- (19) 后学理論批判者は以下のとおり。徐友漁(中国当代文化) 趙敦華(西洋哲学・キリスト教) 鄧曉芒(哲学) 張国清(ポストモダン批判) 王守昌(社会哲学) 馮承柏(社会經濟・近代化) 賀来(公共性問題) 盛寧(ポストモダン思潮批判) 王逢振・郭宏安(ポスト構造主義批判) 章国鋒(文学) 孫紹振(文学) 尤西林(知識人論) 余虹(詩学・芸術) 范進(文化哲学) 韓震(西洋哲学) 叶知

秋 (ポストモダン文化批判)

- (20) 徐友漁, 中国社会科学院哲学研究所研究員, 趙敦華 北京大学哲学系教授 主な著作に『基督教哲学1500年』北京, 人民出版社, 1994年 『西方哲学通史』(第1卷)北京, 北京大学出版社, 1996年 『当代英米哲学学要』北京, 当代中国出版社。1997年
- (21) 張国清『中心与縁辺』北京, 中国科学出版社, 1997年
馮承柏『后現代主義与現代化進展』天津『天津社会科学』1997年 (1)
- (22) 賀来『走向公共性的喪失』長春『吉林大学社会科学学報』1995 (6)
- (23) 盛寧『人文困惑与反思—西方后現代主義思潮批判』北京, 三聯書店, 1997年
- (24) 王逢振 中国社会科学院外文研究所研究員。
- (25) 章国鋒 中国社会科学院外文研究所研究員。
- (26) 孫紹振『“后現代”之后』西安『小説評論』1994 (6)
- (27) 尤西林『后現代主義与人文知識分子』齊齊哈爾『齊齊哈爾師範大学学报』1994年 (4)
- (28) 余虹 中国人民大学中文系教授 主な著作に『思与詩的對話』北京, 中国社会科学出版社, 1991年 『中国文論与西方詩学』北京, 三聯書店, 1999年 『芸術精神』北京, 社会科学文献出版社, 2000年 『革命・審美・解構: 20世紀中国現代文学理論的現代性与后現代性』桂林, 廣西師範大学出版社, 2001年・
- (29) 範進 中国社会科学院哲学研究所研究員。
- (30) 韓震『論后現代非理性主義的新特征』沈陽『社会科学輯干』1995 (2)
- (31) 叶知秋 西北師範大学中文系教授
- (32) 后殖民主義發展に挙げられているのは、いわゆる文化研究と思想・文化批評の分野の研究者が多い。陶東風(文化研究) 許紀霖(歴史・文化批評) 黄平(社会学) 張寬(文化批評) 盛洪(経済) 邵建(文化批評) 楽黛雲(比較文化) 張京媛(文化批評) 羅鋼(思想・文化理論) 楊乃喬(文化批評) 戴錦華(比較文化) 王小東(全球化) 李希光(メディア) 臧新年(知識人・思想)
- (33) 海外漢学界の後現代後殖民に挙げられているのは、「後学」論者および新左派系が多い。李欧梵(文学) 李沢厚(哲学) 叶維廉(文学) 周蕾(文化批評) 梁燕城(哲学) 張維溪(比較文学) 趙毅衡(批評) 徐賁(新思潮・理論) 甘陽(思想) 崔之元(社会経済) 張旭東(文化美学) 劉康(文化批評)
- (34) 董学文 金永兵等著『中国当代文学理論 (1978-2008)』北京大学出版社 2008年10月 第四章・第四節において「ポストモダニズム文論状況」について詳しく論じられている。
- (35) 盖生著『価値焦慮…新时期以来文学理論熱点反思』上海三聯書店 2008年5月 第七章の第三節と第四節において「日常生活審美化」問題が詳細に論じられている。
- (36) 消費文化理論をめぐる動向として、翻訳文献としては
ボードリヤール 鮑德里亞『消費社会』劉成富 全志鋼訳, 南京大学出版社 2000年版
フェザーストーン 邁克・費瑟斯通『消費文化与后現代文化』劉精明訳, 訳林出版社, 2000年が挙げられる。
近年の研究成果としては以下の著作がある。
夏瑩 著(清華大学哲学博士。南開大学哲学系)『消費社会理論及其方法論導論—基於早期鮑德里亞的一種批判理論建構—』中国社会科学出版社 2006年
趙衛華 著(山東大学社会学系。中国社会科学院研究生院博士。北京工業大学。消費社会学)『地位与消

中国知識界は西欧ポストモダニズムをどう見るか

- 費一当代中国社会各階層消費狀況研究一』社会科学文献出版社 2007年
- (37) M・フェザーストン著 川崎賢一・小川葉子編共訳 池田緑訳『消費文化とポストモダニズム』上巻・下巻 恒星社厚生閣 2003年を参照。
- (38) 陶東風『文芸争鳴』2003年6期
- (39) 趙勇『誰的“日常生活審美化”？ 怎樣做“文化研究”？』『河北学刊』2004年第5期
- (40) 魯枢元『評所謂“新的美学原則”的崛起』『文芸争鳴』2004年第3期
- (41) 魯枢元『價值選擇与審美理念—關於“日常生活審美化論”的再思考』『文芸争鳴』2004年第3期
- (42) 陶東風『大衆消費文化研究的三種範式及其西方資源—兼答魯枢元先生—』『文芸争鳴』2004年第5期
- (43) 井波陵一『中国におけるヴァルター・ベンヤミン研究について』東方学報76 2003年

参考文献

- (1) 王岳川:后殖民主义与新历史主义文论 山东教育出版社 1999年
媒介哲学 河南大学出版社 2004年
- (2) 盛宁:人文困惑与反思_西方后现代主义思潮批评 生活·读书·新知三联书店 1997年
- (3) 许纪霖 罗岗等:启蒙的自我瓦解 1990年代以来中国思想文化界重大论争研究 吉林出版集团有限公司 2007年
- (4) 张旭东:批评的踪迹 文化理论与文化批评1985—2002 生活·读书·新知三联书店
- (5) 陶东风:文化与美学的视野交融 福建教育出版社 2000年
- (6) 当代中国文化批评 北京大学出版社 2006年
- (7) 周选:文化表征与文化研究 北京大学出版社 2007年
- (8) 文化现代性与美学问题 中国人民大学出版社 2005年
- (9) 审美现代性批评 商务印书馆 2005年
- (10) 夏莹:消费社会理论及其方法论导论 基于早期鲍德里亚一种批评理论建构 中国社会科学出版社 2007年
- (11) 陈永国:理论的逃逸 北京大学出版社 2008年
- (12) 刘康:文化·传媒·传球化 南京大学出版社 2006年
- (13) 甘阳:八十年代文化意识 世纪出版集团 2006年
- (14) 我们在创造传统 联经出版事业公司 1989年
- (15) 朱新民:西方后现代哲学 西方民主理论批评 上海人民出版社 2007年
- (16) 张光芒:中国当代启蒙文学思潮论 上海三联书店 2006年
- (17) 汪晖·余国良编:90年代的「后学」论争 香港中文出版社 1998年
- (18) 张未民 朱竟 孟春蕊编选:新世纪文艺学的前沿反思 人民文学出版社 2007年
- (19) 姜飞:跨文化传播的后殖民语境 中国人民大学出版社 2005年
- (20) 萧功秦:中国的大转型 从发展政治看中国变革 新星出版社 2008年
- (21) 冯俊:后现代主义哲学讲演录 商务印书馆 2005年
- (22) 陈嘉明:现代性与后现代性 人民出版社 2001年

- (23) 陈胜云:文化哲学的当代发展 江西人民出版社 2007年
- (24) 王光明 胡越 主编:消费时期的文学与文化 社会科学文献出版社 2008年
- (25) 陈晓明:无边的挑战 中国先锋文学的后现代性 广西师范大学出版社 2004年
- (26) 后现代主义 河南大学出版社 2004年
- (27) 李欧梵:未完成的现代性 北京大学出版社 2005年
- (28) 舒也:美的批判 以价值为基础的美学研究 上海人民出版社 2007年
- (29) 传译:文化想像与人文批评 市场逻辑下的中国大众文化发展研究 中国传媒大学出版社 2007年
- (30) 曹卫东:思想的他者 北京大学出版社 2006年
- (31) 肖锦龙:德里达解构理论思想性质论 中国社会科学出版社 2004年
- (32) 中国社会科学院外国文学研究所文艺理论室:跨文化的文学理论研究 百花文艺出版社 2006年
- (33) 张品良:网络文化传播 一种后现代状况 江西出版集团 2007年
- (34) 1-1 刘康 中国现代文化研究在西方的转型—兼答林培端、杜迈可、张隆溪教授
- 1-2 刘康 批评理论与中国当代文化思潮
- 1-3 刘康 全球化与中国现代的不同选择
- 1-4 张颐武 阐释「中国」的焦虑
- 1-5 张颐武 再说「阐释中国」的焦虑
- 1-6 张颐武 面对全球化的挑战
- 1-7 郑敏 文化、政治、语言三者关系之我见
- 2-1 徐贲 「第三世界批评」在当今中国的处境
- 2-2 徐贲 什么是中国的「后新时期」?
- 2-3 徐贲 再谈中国「后学」的政治性和历史意识
- 2-4 赵毅衡 「后学」与中国新保守主义
- 2-5 赵毅衡 文化批评与后现代主义理论
- 2-6 张隆溪 再论政治、理论与中国文学研究—答刘康
- 2-7 张隆溪 多元社会中的文化批评
- 2-8 王晓明 再批评的姿态背后
- 2-9 杨杨 先锋的遁逸